

発話時における北京語音：余剰的特徴の伝達作用

那須，清
九州大学教養部：助教授

<https://doi.org/10.15017/6796104>

出版情報：言語科学. 3, pp.2-5, 1967-03. 九州大学教養部言語研究会
バージョン：
権利関係：



発話時における北京語音

— 余剰的特徴の伝達作用 —

那 須 清

音素の定義については種々の説があるが、諸説を通じて、音素は相互の対立によって価値を生ずるものであるとみなす点では、見解がほぼ一致しているといえるであろう。故に、ある言語における音素体系は、言語音を相互に区別する示差的特徴のみに基いて、これを設定することができる。しかしながら、言語音の全体的性格は、示差的特徴からのみなるものではない。特に、伝達という点から、発話時における言語音の様相を観察すると、示差的特徴以外の余剰的特徴が重要な役割りを果たす場合がある。例えば、ある環境において、示差的特徴がきこえないとか、あるいはそれが完全に実現されないような場合には、余剰的特徴のほうが示差的価値を担うこととなる。小稿では、発話において、伝達上重要な働きをする北京語音の余剰的特徴について、二三述べてみたい。

余剰的特徴 (redundant feature) とは、単音の有する諸特徴から示差的特徴を除いたもので、それはさらに示差的特徴に随伴して現われる付随的特徴 (determined feature) と、ある環境に限って現われる条件的特徴 (conditioned feature) とに分けられる。

北京語の音韻体系については、数篇の研究が発表されていて、それぞれ音素の立てかたに多少の相異があるが、ここでは諸説の最大公約数によって、伝達上注目すべき余剰的特徴とその働きについて考察する。

子 音 音 素 :

北京語の閉鎖音と破擦音には、無気音 : 有気音という対立がある。音素論では、これを軟音と硬音の対立とみなして / b, d, g, …… : p, t, k, …… / とする説¹⁾と、気音の有無による対立とみなして / p, t, k, …… : ph, th, kh, …… / とする説²⁾がある。しかし何れの説でも、これを有聲と無聲との対立とはみなさない。北京語のせばめ音は、r 以外は無気有気を問わずすべて無声音であって、有声音はないといわれているからであろう。しかし発話に現われる音声を観察すると、非強勢音節、特に軽声音節における無気音は、半ば有聲化するかまたは有声音であるし、強勢音節においても陽平および上声では有聲化される傾向が強い³⁾。こういう場合の無気音の有聲化は条件的特徴である。しかるに有気音のほ

うは常に無声であって、有声化することはない。従って有気音の無声という特徴は付随的である。とすれば、もしある環境において、無気音が有声化した場合には、その有声という余剩的特徴が有気音に対して示差的役割を担う、といわざるを得ない。例えば：

「飽」了 / \vee baw / [\vee ba °]	投「稿」 / \vee gaw / [\vee ga °]
「跑」了 / \vee paw / [\vee p'a °]	投「考」 / \vee kaw / [\vee k'a °]
水「藻」 / \vee zaw / [\vee dza °]	「読」書 / ' dwi / ['du]
水「草」 / \vee caw / [\vee ts'a °]	「囑」書 / ' twi / ['t'u]
痢「疾」 / .zji / [.ɬʒi]	推「子」 / .zwi / [.dzɿ]
力「氣」 / .cji / [.tʃ'i]	推「辞」 / .cwi / [.ts'ɿ]

もちろん、これらの語が発話において混同を免れるのは、実際上は主として文脈や話しの場に負うところが多いのであって、余剩的特徴の果す役割りを強調することはできない。次に、摩擦音 / f, s, sj, h / にもこれらと対立する有声音がない。故にこれらの無声も付随的特徴である。しかしながら「父親」 / \backslash fu .tjin / を [\backslash vu .tʃ'in], 「四個」 / \backslash si .gə / を [\backslash zɿ .gə], 「席子」 / 'sji .zɿ / を ['ʒi .dzɿ], 「好」 / \vee haw / を [\vee va °] などと発音すれば、全く伝達不能となる。故に摩擦音における無声という余剩的特徴は、伝達上極めて重要な役割りを果しているわけである。かくて北京語のせばめ音における有声および無声という余剩的特徴は、伝達上無視することができないといえるであろう。

鼻音と側音についてみると、/ m, n, ŋ, l / における示差的特徴は、通鼻および側面という点であって、有声・わたりの強弱・持続部の長短などは、余剩的特徴である。しかしこれらの音を無声音として発音すれば、伝達不能となる。鼻音韻尾 ~n と ~ng の、次に示す余剩的特徴は、ある環境においては示差的価値を担うものとして注目しなければならない。

~n ……入りわたり強、持続部短、口蓋化あり (付随的)

~ng ……入りわたり弱、持続部長、唇音化あり (条件的)

この尾音を持つ音節が後続音節と続けて発音され、音の同化によって調音点が近似する場合や、閉鎖が完全に行われない場合には、上記の余剩的特徴によって区別されることになるものと考えられる。例えば：

銀子 / 'jən .zī / ['ji ° ŋ .dzɿ]	棧房 / \backslash ʒan'faŋ / [\backslash dʒaɪ'faŋ]
蠅子 / 'jəŋ .zī / ['jiŋ' .dzɿ]	賑房 / \backslash ʒaŋ'faŋ / [\backslash dʒaŋ'faŋ]
運煤 / \backslash jwin'məj / [\backslash y ^{I} m' mət]	官名 / -gwan'miŋ / [-g ° uam'miŋ]
用煤 / \backslash jwiŋ'məj / [\backslash yom'mət]	光明 / -gwaŋ'miŋ / [-g ° oam'miŋ]

このような場合、主母音の声音的ながい (/ jan : jaŋ / において特に顕著) がむしろ大

きを役割りを果たすこともあるであろう。

母音音素：

母音音素の体系については、諸説によってかなりの不一致があるので、ここでは詳論を避けたい。ただ、北京語の母音における音長は示差的特徴ではないということは定説である。しかし次に示すように、r化された結果、同一音素よりなる音節に変化するといわれる場合には、主母音の音声のなちがいととも、その条件的特徴たる音長（主母音およびr韻尾）の差もまた示差的価値を担うと考えられる。例えば：

瓜ル / -gwar / [-g ^o wa ^ɹ]	鴨ル / -jar / [-j ^a ɹ]
官ル / -gwar / [-g ^u waɹ [•]]	烟ル / -jar / [-j ^a ɹɹ [•]]
歌ル / -gər / [-g ^o ɹ [•]]	舌ル / 'šər / ['š ^o ɹ [•]]
根ル / -gər / [-g ^o ɹɹ [•]]	神ル / 'šər / ['š ^a ɹɹ [•]]

（下段の2組においては、尾音rの音色のちがいも示差的価値をもつ）。解釈のしかたによっては、上記の対立はr化しても、音素はやはり異るとされる⁴⁾（例えば「官ル」は/gwanr → gwar / ではなく /gwanr → gwajr / であって、「瓜ル」/gwar / と対立する）。しかしこの説によるとしても、音長の差は依然として余剩的特徴である。「歌ル：根ル」に限って主母音の長さに音韻的対立を認める説があるが、これは音素論としては首肯し難い。

韻律音素：

声調素は4～6種とされている。すなわち、①陰・陽・上・去の4種とするもの⁵⁾、②ゼロ声調素を加えて5種とするもの⁶⁾、③さらに上声が陽平に近く変化したものを加えて6種とするもの⁷⁾以上が主な解釈法である⁸⁾。この何れをとっても、音節音高の変化の型が示差的とされていて、音長は付随的特徴となる。しかし、いわゆる軽声を含むか含まないかによって対立する場合には、そのちがいは音響学的には音長の差として現われるという。音響学的特徴が伝達上にいかなる働きをするか明らかにされていないが、示差的役割りを担う可能性が考えられる。例えば：

東西 $\overline{11} \quad \overline{11}$	大意 $\overline{51} \quad \overline{51}$
東西 $\overline{11} \quad \overline{0}$	大意 $\overline{51} \quad \overline{0}$

そして、これは強勢素（アクセント核）に関連する問題でもある。上記例の上段は核が後の音節にあり、下段は前の音節にあるが、これらの語が相互に区別されるのは、それぞれの音節の強さのみでなく、音節の長さという付随的特徴にもよる、といえるからである。前記①②の見かたによるならば、声調における key (B. Karlgren の用語⁹⁾) も余剩的特徴となる。すなわち：

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{油井, 急死, 劉五} \quad \quad \quad \overline{35} \quad \overline{214} \\ \text{有井, 擠死, 柳五} \quad \overline{214} \quad \overline{214} \rightarrow \overline{24} \quad \overline{214} \end{array} \right.$$

このような場合、本来の陽平 $\overline{35}$ と陽平に近く変化した上声 $\overline{24}$ との区別は、key の差によってなされると考えられる。

文音調と声調との関係については、現段階では主観的観察による研究のみしか発表されていないので、その正確な状況は全く不明であるが、筆者が予備的な実験を行ったところによると、伝達上における key の働きを看過することができないように思われる。

注1) 例えば藤堂明保「中国語音韻論」。

2) 例えば C. F. Hockett : Peiping Phonology (J. A. O. S. 67)

3) 土居光知「日本音声の実験的研究」14 ページ。拙稿：北京語音二題（文学論輯，第3号）。

4) C. F. Hockett : 上掲論文。平山久雄：北京語の音韻論に関する二三の問題（言語研究，第三十五号）。

5) 例えば傅懋勳：北京話の音位和拼音字母（中国語文，総第47期）。

6) 例えば徐世榮：試論北京語音的“声調音位”（中国語文，総第60期）。

7) 例えば C. F. Hockett : 上掲論文。

8) 藤堂明保，上掲書では，四声のほかにも中性調と輕声調とを認め，あわせて6調となっている。

9) B. Karlgren : A. Mandarin Phonetic Reader, p.22.

SYNOPSIS OF JAPANESE ARTICLES
AND ORAL PUBLICATIONS

關於北京話音素的殘余特徵

—— 在傳達時所起的辨別作用 ——

那 須 清

任何語言的音位系統可以依據其音素所含有的辨別特徵而決定。不過，音素的整個性質並不是僅僅有辨別特徵的。當實際說話時，如果不能清楚地聽到某一個音素的辨別特徵，或由於聲音環境的關係不能顯示其辨別特徵的時候，這個音素的特点可能是由殘余特徵 **redundant feature** 來表現的。

大家都知道，北京語的語音系統里有兩種鼻音尾韻母 $\sim n$ 和 $\sim ng$ 的對立。這組韻尾因受了后一個音的影響被同化成類似聲音的時候，它們可能由於殘余特徵（比如：前流音渡的強度，持阻階段的長短，有無顎化和唇化現象等等）來顯示兩者之間的差別。元音的音長不是辨別特徵，可是在 \sim 化韻里有時候主要元音的音長實際上可能成為辨別的標識。每一個聲調的平均音高和音長也不能算做辨別特徵，可是由於連字變調的規律而上聲變成近似陽平調的時候，它和原來的陽平調之間的差異就表現在它們的平均音高上。有調音節和輕聲音節之間的差異，根據聲學實驗，寧可說在它們的音強差異上不如說在它們的音長差異上。這些現象都可以說是殘余特徵之在傳達時所起的辨別作用吧。

THE DIALECT IN CHINA

Kiyoshi Nasu

A great variety of idioms spoken by seven hundred million inhabitants in China is roughly divided into Altaic family, indo-European family, Sinno-Tibetan family, Austro-Asiatic family and Austronesian family. Among them, the Chinese language, a member of Sinno-Tibetan family, is spoken by about 80% majority of the

whole population. Chinese has five main dialects as follows:

- 1. Northern dialects
 - ┌ Northern dialects(Pekinese)
 - ├ Northwestern dialects
 - ├ Southwestern dialects
 - ├ Kiang-Hwai dialects
 - ├ Siang dialects
 - └ Kan dialects
- 2. Wu dialects
- 3. Hakka dialects
- 4. Yue dialects(Cantonese)
- 5. Min dialects
 - ┌ Amoi dialect
 - └ Fuchow dialect

The most current of these is Northern dialect, chiefly composed of the so-called Mandarin, having no less than four hundred million speakers. This fact has its evident historical reason: at first there was the common language called Yayen as early as before the 8th century B.C., which was based on the dialect in the neighborhood where Chang'an is at present; then it was by Shih Huang Ti of Ch'in gaining reign over the whole country that the status of Northern dialect was raised higher; since then, the political and cultural center lay generally in what is called Chungyuan province of the Huanghe valley; thus Mandarin was placed in a firm position as a common language especially with the establishment of government seat in Peking since Yuan dynasty.

Now the difference of language as seen in the Shi-King and Ch'u-tz'ü reflects that of the southern dialect from the northern in about the 5th century B.C. Also the exegetics popular in the Han era shows that the language underwent a great change in those days. The modern Wu and Yue dialects have their sprout in the eras

from Ch'in to Han. The invasion of other northern races, aggravated since about the 4th century, caused the mass evacuation of the Han race. This gave birth to Hakka dialects. Min dialects also attribute their origin to the Han race being forced to move into the Fukien district in order to escape the warfare and conquest in the south by the successive emperors during the centuries from the 3rd B.C. up to the 10th A.D.

What remarkably distinguishes now Northern dialect from other southern ones is whether or not the jusheng-tone may be heard. The phonetic transcription of each dialect is shown in the following:-

THE NORTH WIND AND THE SUN

Pekinese:

ju-i-xui vpei-fəŋ kən t'ai-jəŋ tʂen-tai-nar
 tʂəŋ-lun ʂei-təvpen-sɿ ta

Wu dialect:

·hY·I tʂø 'po.foŋ .ta-t'v-iã-k'a-k'a .lə.lə tʂã
 lən ʂp.pən_ŋ.kə pən_I.z d'zu

Cantonese:

pakl fuŋl t'uŋl ma:iɿ jatlt'auɿ jauɿ jatlts'iɿ
 haiɿsyɿ tsəŋllənɿk'æyɿ ləŋɿkoɿ tsil tsuŋl pinl
 jatlkoɿ punɿsiɿ ta:iɿ

Fuchow dialect:

·pøy·huŋ ·kø ni'thau tʂia 'lə tʂəŋ tʂie 'nøŋ
 ku puɿnøŋ

Hakka dialect:

tʂutnɿt pæk-fuŋ t'oŋ net.t'æu tʂəŋ'lön ma:n
 nən'kə pun'sɿ t'ai